

思ふ、宇宙の尊き靈の表現が人なり。靈は肉體を宿として此の世に現はる、故に靈は永久に宇宙に存在して消ゆる時なしと、此に於て心中喜びと望みとを生ぜり。

夕日は漸くかくれ行き、大空は暗くなり、森は墨繪の如くなり、地はうす暗き暮につまれば、鳥は時に歸り、入相の鐘は靜かに響き、かくて秋の夕は眠りに入れり。吾れは秋の夕ぐれを愛す。其のなやめるが如くにして力ある、其の泣くが如くにして光ある、何れの時か之れに如かむ冷かなる風吾が面を拂ひ金色の夕日吾が心に深くしむ。

夜月光を踏みて散步す。空清く月明かなり、枯枝虚空に高く、星は其の枝に花を咲かせり。壯大にして崇高なる此景、偉大にして靜寂なる此天地、自然は此美觀を吾が前に提す。あ、何ぞ人事に醒醒たるや、只天を頼まむ、星を頼まむ、月を頼まむ、而して大なる清き情を養はむ。吾れ此の思ひを得たる時あらゆる世の艱難、あら

ゆる人の嘲笑に堪え忍びて單身天地の間に立たむとの情油然而として湧きぬ。

友と山に登りたり。満山皆紅葉、仰げは白雲頭上に在り、俯すれば流水足下に在り。此時吾れ思ひぬ。人の勉強し修養するは高き山に登るが如し。一步一步上るに従ひて眼界廣くなりて、自己の小なるを益々明かに知るに至る。智徳乏しければ自ら足れりとなす、これ山の麓にありて小世界の内の吾れを見るのみと。又思ひぬ。此日此時此人と此處にて遊ぶ。これ最初にして最後なり。再びある可からず。されば、吾れ能ふ限り友につくし、感じ得る限りを感じて、其の深き意義を味はむと。

日々堅實に行ひて倦まず、熱誠を盡して怠らず。碎けざる意志と、燃ゆるが如き強き反省とを以て日を送らむ。いさゝかも外面を飾るなく、自己の内部に存する至誠を遺憾なく發揮せむ、「戦へよ、討死せよ」との語を強く感ずる時、吾が心にいふべからざる確信と勇氣とを生ず。(完)

彙報

第廿四回文科學術談話會

大正元年十月五日午後一時より例の如く講堂に於て開催す。講演順序は左の如し。

一開會の辭

下村 先生

一明治年間に於ける女子訓の變遷

吉田 先生

一和宮親子内親王の御事蹟

文四 杉山 はな

一潜在意識

文四 源 みい

一戰國時代の女性

文三 佐々木 清

開會の辭に附帶して下村先生より爾後文科會の講演者は三四年生に限らず各學年より盛に出で、研究事項を發表するに勉むべしとの御話あり。吉田先生の御講話は本誌別項に記載すれば此處に贅せず。三氏の研究とごりに興深

く且有益なるを覺えぬ。又場の前面には歴史上有名なる婦人の筆蹟を陳列せり。今日の講演が不思議にも女性に關する事多ければとて下村先生より貸與せられしものなり。肉筆あり、寫真版あり、木版あり、卷物あり、書籍状のものあり。これ亦裨益する所少からざりき。

御來臨の先生は吉田先生、下村先生、下田たづ子先生等にして卒業生の來會せられしもの僅に一名なりき。

○新入賛助員
村田よしを、齋藤彌生

第三回會計決算報告

収入 金八拾五圓參拾六錢

内譯 五拾圓八拾六錢 前回よりの繰越金

客員の會費

八拾錢
拾參圓參拾八錢
貳拾圓參拾貳錢
支出 金四拾參圓九拾四錢五厘

内譯

參拾九圓九拾七錢
參圓拾五錢五厘
四拾五錢
參拾七錢
差引殘高 金四拾壹圓四拾壹錢五厘

會費領收

四十五年度分
穗積 銀 富岡 きの 桑田 龍子 田北 よれ
宮川 芳子 栗崎 トキ 井淵 英 清水 俊尾
大村 都 村田 よしな 中村 芦子 三宅 よし
芦川 春子 鷺尾 幾子 岩崎 まつしま 成瀬 よし
大正二年度分
栗崎 トキ 大村 都 三宅 よし
外に客員安井哲子倉橋惣三兩先生より四十四年度分として金
四拾錢宛領收せり

交詢

●母校たより

茗溪橋畔秋漸く更けて風瑟につもる落葉に哀を
吟じ居り候。さても歎きの狹霧深き暮秋のあは
れは北海のほとり南國のはても御同様の事と存
候。例に母校の消息を些御報道申上ぐべく候

○大正元年九月十日第二學期始業式舉行せられ
候。悄然として講堂に集りし私共は上壇の間の
白木の杉戸に更に悲みの念を添へ申候候。式終
りて長井長義先生より女子の心得に關する御話
を蒙り申候。御話の要領は櫻蔭會會報第三十二

號にのせられあり候

○天日光暗き九月十三日午前八時十五分より
明治天皇奉悼式を舉行致し候。憂愁の色森陰の
氣滿堂を罩め一同肅然として 陛下の尊影を拜
し奉る裡に、校長は奉悼の辭を讀み給ひて「熱
涙滂沱五内裂くるが如く殆ど情を成し難きを如
何せん」と聲をこめたまふや式場遽に嗚咽の
聲起る。奉悼の歌を唱へ奉るにも胸塞がりて聲
は振へがらにて候ひき。式終りて吉田先生より
陛下御盛徳の一端を拜承いたし候。これも櫻蔭
會報第三十二號にかゝげられしものに候。

○星疎に弦月影淡き十三日の夜二重橋畔に謹み
て御大喪儀を奉送いたし候。嗚呼大内山の松風
の音、篝火の色、御發軔合圖の號砲、諸寺の鐘
の音、御輻車の軋り「哀の極」の悲韻など深く
胸底に刻まれし悲の印象は、いつの世にか
消ゆることの候ふべき。斷腸の語もこの悲をあ
らはすにはあまりに平凡に候。

○十一月六日は畏くも 明治天皇陛下の百日祭
に當り候へば、午後一時より講堂に參集西にむ

かひて遙拜いたし候。終りて校長より限りなき
御坤徳を頌し給へる御話承り候へば更に深き哀
痛の情新に涙と共に湧きいで申候。
○今年の秋の郊遊會はひかへ申候。然し文科二
年の鎌倉史蹟しらべ、同二年二部の箱根研究、
文科並に技藝科三年の日光旅行は見學の爲め止
むを得ず夫々目的を達し申候。姉君達の御思ひ
出や如何に。

○十一月九日本校職員生徒一同は滿腔の熱誠と
喜悅とを以て、奈良女子高等師範學校の旅行團
を歓迎いたし候。御慰にもと豫て企圖せし本校
獨特の餘興はこの折柄畫餅に歸し候ひしも、電
燈の光炫き大講堂に相會し、兩校長をはじめ兩
校生徒總代の親善懇篤なる挨拶を換されし時は
さすがに姉校よ妹校よと互に握手したる心地い
たし、不思議なるばかり懐かしき情湧き出で申
候。食堂の入口には Well come の金文字八つ手
の縁に映えてうつくしく、會食中の談笑はポリ
ホンの妙音に一しは興を添へ申候。夜は再び講
堂に知己相集りて盡させぬ物語に舊情を温め、